

所得再分配における分配者・被分配者の選好

——アンケート調査と経済実験の対比からの検証——

飯田善郎

要 旨

所得再分配における分配者、被分配者の選好を調査するために、社会人を対象にしたアンケート調査と学生を雇用した被験者実験の両方を行った。ディクテーターゲームに類似する条件を参加者に提示する形でおこない、調査手段から生じる選好の違いと共通点を検証している。結果としては、被験者実験では分配者が表明する被分配者への分配額はアンケートに比して少なく、また被分配者が分配者に求める分配額はより多くなる傾向が見られた。より詳細に検討すると、アンケート回答において、自分が豊かで分配する側なら多くの分配をする代わりに貧しければ多くの被分配を求める、または、自分が貧しい時にはあまり分配を求めない代わりに自分が豊かな時も分配したくないという、一方で利他的で他方で利己的な選好が多く観察された。このことから、単純に被験者実験が報酬という金銭的誘因から参加者の行動をより利己的な方向へ誘導し、それが無いアンケート調査はより規範的な回答を導きやすいとは言えないことが示された。こうした回答傾向になる理由は今後の検証の課題となる。さらに格差発生要因が運、努力、才能のいずれか一つのみと仮定した場合の分配の選好を尋ねた。その結果アンケートにおいては所得格差が運の要素で発生する場合には、努力や才能で所得格差が発生する場合よりも、分配者の立場でも被分配者の立場でもより多くの再分配を選好することが示された。これは多くの被験者実験で確認されている傾向である。しかし本論で行った被験者実験ではサンプル数が充分でないためか、アンケートと異なりその傾向は確認されなかった。

キーワード：所得格差、所得再分配、経済実験、アンケート調査、ディクテーターゲーム

1. 序

所得格差は多くの国において喫緊の問題となっている。多くの社会が格差是正の制度を持つが、どの程度是正するのが正しいといえるかには一般性を持つ答は存在しない。所得の再分配はゼロサムゲームである。利己的個人を仮定する時、所得の高い個人が低い個人に進んで再分配する動機は存在しない。また、低い個人は高い個人から可能な限りの再分配を受け取る動機を持つ。従って分配者と被分配者の双方が完全に合意する再分配の制度は存在し得ない。しかし多くのディクテーターゲーム

実験において、高所得者が進んで自分の報酬を低報酬者に分け与えるという結果が示されている。(Camerer (1995, 2003)) このような経済的に非合理的な選択の理由は、様々に検証されているが、現実の社会生活の中でも同様の傾向を見出すことが出来るかについては十分な検証がなされていない。また、多くの実験が学生を被験者として行われているため、年齢や所得、就業形態、扶養者数など幅広い属性にどれほど再分配選好が影響されるかについての示唆を提供できていない。本論ではディクテーターゲームと基本的に等しい仮定の下で社会人を対象にしたアンケート調査を行うと同時に、被験者実験との相関を検証し、人々の再分配への選好を明らかにすることを旨とするともに、アンケートと被験者実験という調査方法によって現れる傾向を双方を対比することで示そうとするものである。

ディクテーターゲームを用いた数々の経済実験が、格差の発生要因そのものが格差是正に対する態度に影響することを示している。Hoffman, et al. (1994) や Cherry, et al. (2008) は、分配者がクイズなどでその地位を獲得すると、偶然で分配者の役割を割り振られる場合よりもより利己的になることを示している。Oxoby and Spraggon (2008) は、分配者は富を稼ぎだした側に重く分配する傾向を見出している。ディクテーターゲームにおいて分配者の地位がどうやって得られたかが与える影響は、かなり微妙な要因にも依存する。Rousu and Baublitz (2011) は、最初の所得分配を決めるための課題で、人によって難易度に差があると被験者が知っている場合、分配者がより気前良くなることを示している。これらの研究が示すものは、分配者が自分の稼得が運に依存すると考えるほど分配し、また自分の力で稼いだと信じられるときほど分配に消極的になるということである。自分の力で稼いだものに対して強い所有権を感じ、偶然得たものへの所有権の感覚はそれに劣るといった感覚は一見自然であり、こうした感覚は現実の世界でも確認できるかもしれない。そして、それは現実の格差の要因をどう認識しているかで求める再分配の程度が違ってくことを意味する。その点を詳細に突き詰める際に注意すべきは、現実の仕事でよいパフォーマンスをあげることが出来、結果として稼ぐ事ができる人は、努力のみならず生来の高い能力にもそれを依存していることである。生来の能力を持つか否かは、本人のコントロールの外にあるという意味で運と同様の性質を持つ (Weiner (1972, 1985))。であればこうした才能が格差の要因と認識されるほど、努力が格差要因である場合よりも運に近い要因で生じた格差だと認識され、分配者はより鷹揚になるものだろうか。この疑問に答えるため、仮に所得がこの3つのいずれかのみで決定されるなら、再分配の選好はどうなるかについても確認している。

また、所得再分配の公的制度の策定においては被分配者の意向が重要であるのに、多くのディクテーターゲームが被分配者の選好に十分注目していない。本論では被分配者の選好を調査し、そこにも同様の差が見いだせるかを調査した。

さらには、現実の所得の再分配は、課税と補助金による同世代間の移転と、公債による将来世代への負担移転や年金制度のような異世代間との間の所得再分配がある。再分配への選好は、同世代間と

異世代間で異なるだろうか。異世代間移転についての選好を被験者実験で確認することは不可能である。ここではアンケートの結果からその選好の差異を探る。

結果は、およそ以下のとおりである。まず分配、被分配の選好においては社会人対象のアンケートにおいても平均では正の分配額の選好が表明されると同時に、被分配額でゼロを表明する回答者がおり、実験同様に利他的な回答が確認された。その大きさには年齢との相関が見られ、年齢が上がるほど自分が貧しい立場ならより多くの分配を受けたがると同時に、豊かならより多くを分配してもいいという、互助精神的な傾向が見られた。また男性が分配者として女性より気前のいい態度をとるといいう回答の傾向を得たが、これは実験室での結果と符合しないものである。さらに所得の増加によって全所得のうち分配してもいい割合が上がることも下がることもなく、しかし受けたい分配の割合はやや減少した。アンケートにおいて表明された所得額に対する受けたい分配額の割合は、謝金として実際に受け取る報酬額に実験中に表明した額が直接関わる被験者実験のそれに比べて低く、逆に分配者として分配してもいいと表明した割合は高い。つまり仮想的な質問においては気前よく、あるいは慎重深く回答している可能性がある。一方で、相互扶助的な、分配者としては利他的で、被分配者としては利己的な回答をするものも多く、単純に被験者実験が利己的な選択を誘発し、アンケートではそれが無いにより規範的になるとは言えないという結果になった。世代間については将来世代への分配は同世代間よりもやや多くなる傾向が見られたが、逆に国債発行で現在の所得を増やし将来世代に負担を残すような被分配は、同世代からの被分配とあまり変わらなかった。また、アンケートにおいては運による所得格差はより高い分配および被分配の選好を誘発することも確認された。

本論の構成としてまず次章においてアンケート調査の概要と結果を述べ、3章で対比する被験者実験の概要と結果を説明する。4章では結論とディスカッションを述べる。

2. アンケートの調査の概要と結果

(1) 調査方法の概要

アンケートは日経BPアンケート調査を用い、2013年1月に20代から50代までの有業者を対象を絞ってインターネット上で回答を求め、1730の回答を得た。質問ではまず、年齢層、性別、正社員か否か、未既婚、共働きか否か、扶養者数、税引き後の手取り所得といった属性を尋ねている。回答者の年齢層は20代から50代までほぼ均等に分布し、男女比はおよそ6:4、所得の平均は562.7万円、中央値は500万円である。属性の詳細は付表1に示す。

所得再分配に関しては、分配相手にどのような相手を想定するかで分配の選好は変わってくると考えられるが、全ての可能性を網羅することは不可能であることと、実験との対比の便宜上条件を揃えるため、また筆者の過去の調査（飯田（2009））から多くの人が自分と似た条件の人を自分の所得の評価の基準にすることを確認しているため、年齢、扶養者数など他の条件は同じで可処分所得が自分の

2倍である誰かから再分配を受けられるならどれだけ欲しいかと、同じく他の条件は自分と同一で所得が半分の誰かに所得再分配するならどれだけ出せるかを聞いている。これはすなわちディクテーターゲームにおけるアロケーター（分配者）とレシピエント（被分配者）に当たる立場での回答である。再分配を受ける場合の希望額は自分の所得の50%を上限とし、与える場合は自分の所得の25%を回答の上限としている。これは、再分配の結果当初所得との差が逆転せず、完全平等になるところを再分配の上限とするためである。この問いは、同世代間の再分配と異世代間の再分配の2つの条件について尋ね、(将来世代の所得が半分ならどれだけ再分配できるか、将来世代の所得が2倍になるなら、どれだけ再分配を受けたいか) またそれぞれについて、条件を特に付けない場合と、努力、才能、運のいずれかのみで所得が決まっている場合を尋ねている。

(2) 分配・被分配選好の一般的傾向

所得格差の要因に特定の仮定をおかず、同世代間の所得再分配の選好を尋ねた場合の、分配者と被分配者に当たる立場での回答を図1、図2に示す。所得額が多ければ分配者として認める再分配額が大きくなると考えられるため、単純な分配額では傾向を把握しにくい。そこで分配できる額を自分の所得で割った割合で表す。比較のため同様に被分配者として受け取りたい分配額も所得で割った割合で表す。

図1に示されるように、約25%の回答者が全く分配しないか、非常に低い割合でしか再分配をしないという合理的な選択をしている。逆に言えば75%がある程度以上の再分配に応じるとしている。その中でも17%程度が、完全平等に近くなる再分配を許容するとしており、ほとんど再分配しない回答とそこの2箇所突出している。結果、再分配に応じる額は所得の10.2%というのが平均額となっている。

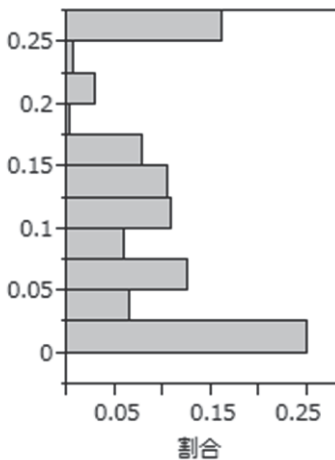


図1 分配者として分配したい所得割合

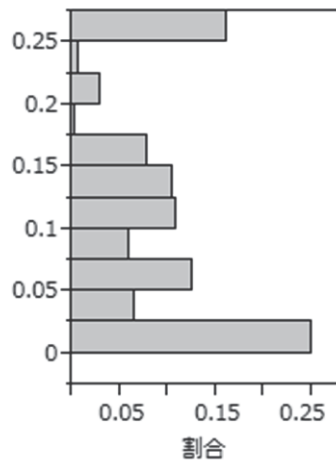


図2 被分配者として受けたい所得割合

被分配者側の選好においては、35%程度が最大限かそれに近い再分配を求める、合理的な回答をしている一方、15%程度がまったく再分配を求めないという選択をしている。平均では所得の29.9%の再分配を求めている。

所得水準が高いほどより多くの割合を分配することを許容し、また低いほどより多くの割合を求めるものだろうか。所得水準ごとの平均の再分配選好を表すのが図3,4である。

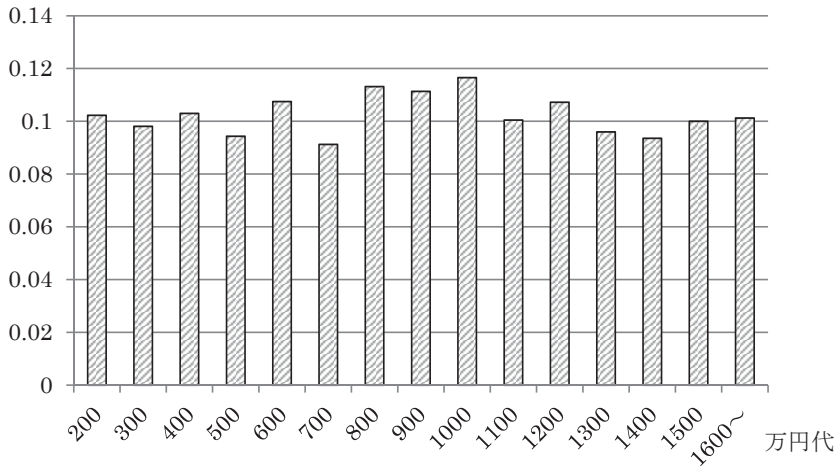


図3 所得水準と選好する分配割合

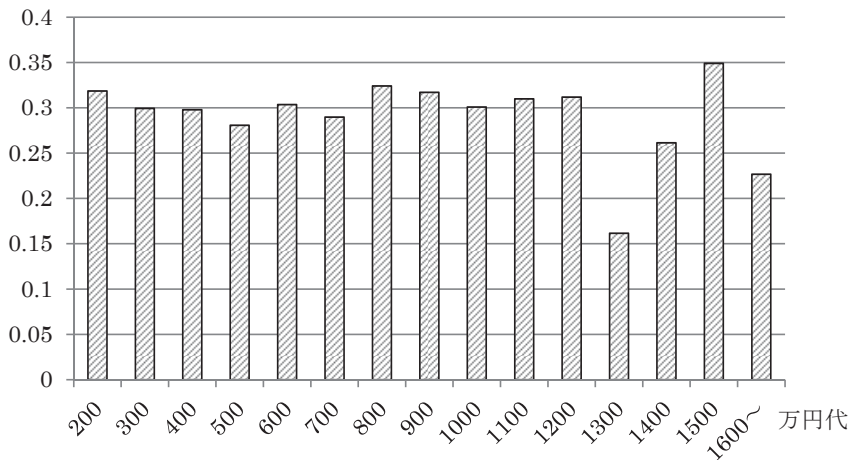


図4 所得水準と選好する被分配割合

ここから明らかなように、分配者の立場ではおよそ所得の10%程度を再分配してもかまわないと考え、その割合は所得の多寡にほとんど影響されない。それは自分が被分配者になったときも同じで、30%程度を受け取りたいという傾向は所得の多寡にほとんど影響を受けない。ただし1200万円を超え

る高所得者層になると受け取りたい割合がそれまでと比して減少する傾向が見られる。

他の属性と、分配、被分配の選好を表すのが図5,6である。図5に注目すると、年齢が高くなるほど高い割合の分配を選好する傾向が見られる。また、男性のほうが女性よりも高い分配を選好する傾向が見られる。未・既婚による差、共働きか否かによる差は小さい。扶養人数が多くなる分配を増やす傾向も見られるが、これは回帰分析では有意な説明要因とはならなかった（付表1,2）。被分配の選好を示す図6に注目すると、分配の選好と同様に年齢層が上がるほど高い被分配率を求め、男性の方

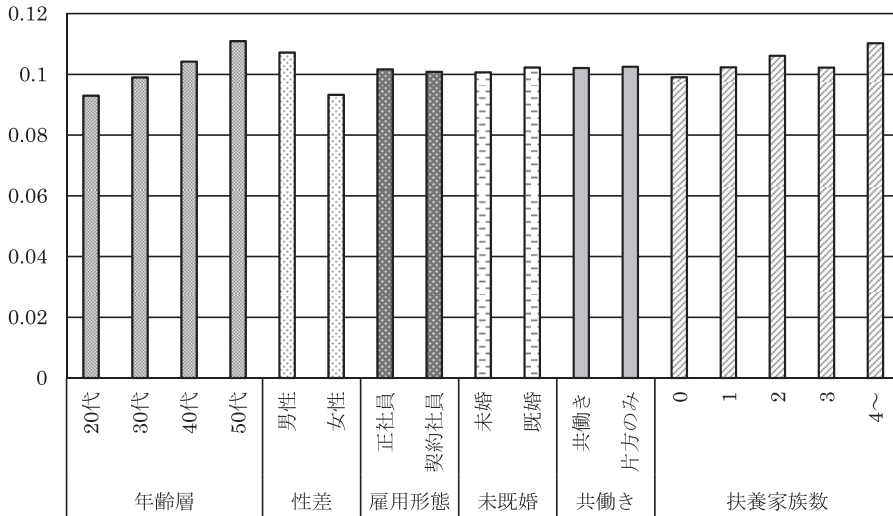


図5 回答者属性と分配の選好

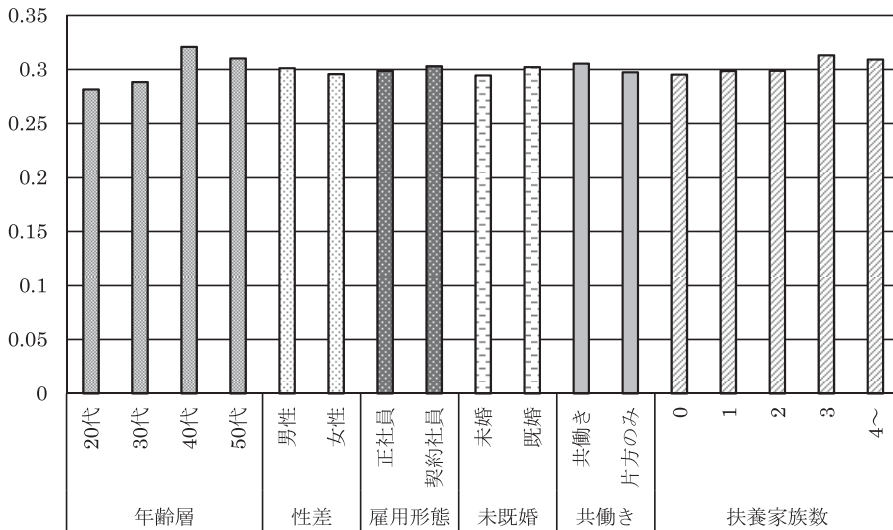


図6 回答者属性と被分配の選好

が女性よりやや高い分配率を求めるが、他の要因同様あまり明確な差としては現れない。回帰分析の結果、被分配の選好に有意に影響するものとして年齢の正の効果と、所得の負の効果は確認されたが、男女や未・既婚、共働きか否か、扶養者数の影響は確認されなかった。

分配率の選好と被分配率の選好の相関係数を計算すると、相関係数は0.4161で、1%水準以上で統計的に有意な相関が確認される。分配率と被分配率の比例関係、すなわち助けたくない人は助けられなくもない、助けたい人は大いに助けられたいという傾向が見出せるということになる。ただし、0.41という数値が表すようにそれと異なる選好を表明した回答も多い。図7は横軸に分配率の選好、縦軸に被分配率の選好を置き各人の表明した値をプロットしており、図8はその密度を表している。図8から分かるように、回答者の回答傾向は、1) 図上左下に位置する、他者を全く助けたくないし、助けられたくないという独立独歩型、2) 右上の可能な限り助けたいし助けられたいという互助精神型、3) 左上に位置する他者を助けたくはないが自分は助けられたい利己型、そして4) 45度線上に分布する1)と2)の中間という中庸型に大きく分けることができる。

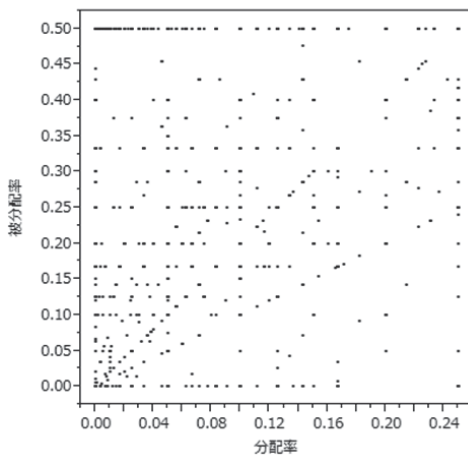


図7 分配・被分配の選好：プロット

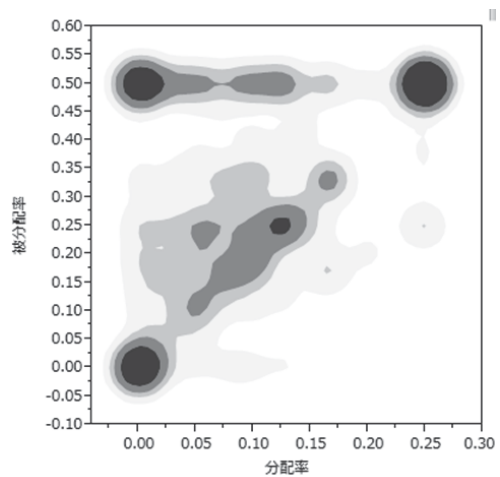


図8 分配・被分配の選好：密度

分配率と被分配率の選好の比例関係は相関は1)、2)、そして4)のタイプの人々によって構成され、しかし3)のタイプの人々によって、相関係数が引き下げられているという関係が見出せる。

これらのグループに属する人々に何らかの共通する属性は見出せるだろうか。恣意性はあるが、上限値、下限値からそれぞれ選択域の10%未満で（分配率なら0.025%、被分配率なら0.05%）区切って1)、2)、3)に属する人々のグループを作り、属性ごとに比較すると、年齢層、雇用形態、未・既婚、所得などでは統計的な有意差は見られないが、男女では有意差が見られ、2)の互助精神型において男

性比が1)の独立独歩型や3)の利己型よりも有意に高いという結果が得られた。

(3) 所得格差決定要因と再分配選好

序で述べたように多くの被験者実験が格差の発生要因が再分配の選好に影響することを指摘している。これらはアンケート調査でも確認できるだろうか。仮に所得が努力のみ、才能のみ、運のみで決まる世界であればどのような再分配を望むかを尋ねた問いの回答の平均値が図9, 10である。分配する側でも、被分配の側でも、努力より才能で決まる世界のほうが、そして才能よりも運で決まる世界の方がより高い再分配を選好する傾向が見られる。分配側の場合の努力と才能の差は統計的には有意でないが、それ以外の差は5%水準で全て統計的に有意な差となっている(付表4)。

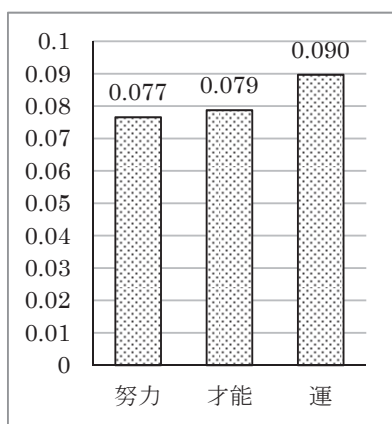


図9 格差要因と分配選好

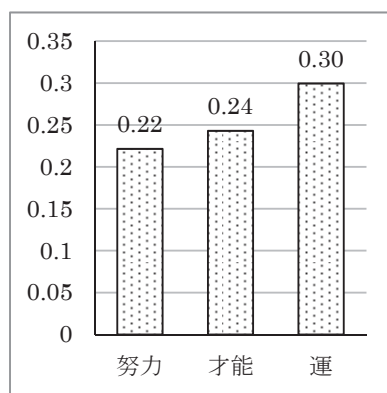


図10 格差要因と被分配選好

才能による差は、生まれ持っているのものであり、それはコントロール出来ないという意味では運に近い。その分才能による格差のある世界での再分配選好は努力による格差の場合よりも運による差に近いという仮説が考えられるが、実際の結果はむしろ才能と努力の値のほうが近く、運は突出して再分配の選好を分配側でも被分配側でも高めるという結果が確認された。才能はそれがコントロールできるものでなくても、自分の物でありそれによる格差は受け入れられるべき権利であるという感覚があると考えられる。

(4) 世代間の所得再分配

被験者実験では検証が難しい課題に世代間の所得再分配がある。年金は現役世代からの所得移転であるが、現在の日本は相当額の国債・地方債残高を積み上げて社会保障や公共事業を行い、その負担を将来世代に回している。これは形を変えた将来世代から現役世代への所得移転である。こうした世

代間の所得再分配は、同世代間の所得再分配と選好が異なるだろうか。アンケートの回答を見ると、同世代にしたい再分配の割合が10.2%であるのに対し、将来世代に対してしたい再分配の割合はより高く10.9%であった。差は僅かであるが、統計的な有意差が確認された ($t=5.47, p<0.0001, n=1730$)。また、同世代間から受けてほしい再分配の割合は29.9%であるのに対し、将来世代から受けてほしい再分配は29.5%であった。これはわずかに低い統計的な有意差は確認されなかった ($t=1.18, p=0.23, n=1730$)。分配相手として将来世代を現役世代より重視する傾向は、親世代が子世代を気にする結果という仮説が考えられるが、実際には単回帰でも他の要因を考慮した重回帰でも扶養者の数と分配割合に有意な相関は確認されなかった。

同世代間での所得再分配では所得格差の要因ごとに選好の差が見られた。世代間でも同様の傾向が見られ、運による差では最も再分配に積極的になり、続いて才能、努力という順番で再分配の選好の程度が低下する。ただし、図11, 12からも確認できるように同世代間での再分配と比べて原因ごとの分配率の差は小さい。このため努力が格差の原因となる時の分配率および被分配率の選好は才能が原因の場合のそれらと5%水準での有意差に達しない。世代間の問題になると格差の原因と再分配との相関が弱くなるのは、より仮想度が高い問いになることで、普段の生活の中での公平感の適用が難しくなることが一因と考えられる。図では同世代間での回答との有意差を検証した結果も、5%水準で有意なら*、1%水準で有意なら**で示している（付表5に検定結果を示す）。分配者は同世代より将来世代により高い割合を分配したいと考えるが、才能や運で格差が生まれるという仮定の下では、その差は有意なものではなくなる。逆に被分配者は、将来世代から受け取りたい割合は同世代から受け取りたい割合とほぼ同程度であるが、格差の要因に条件がつくとその差が顕著になるという傾向が見いだせる。この傾向を説明する一貫した論理を見出すのは難しい。むしろ先述のように、3つの格差原因の間の差が小さくなることがその主たる要因と考えられる。

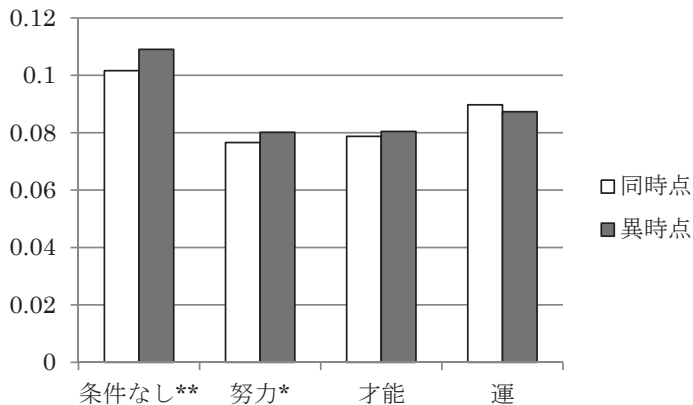


図11 同時点、異時点の分配選好：格差要因別

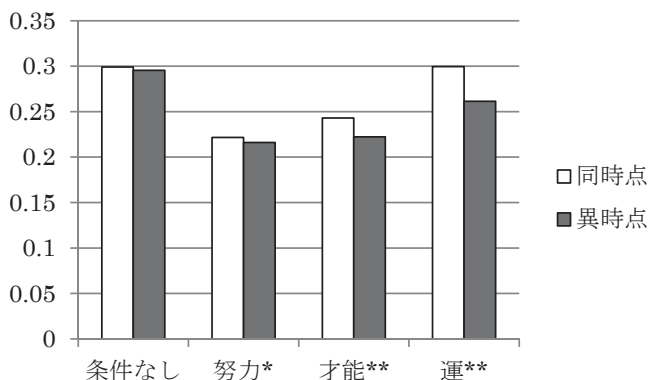


図 12 同時点、異時点の被分配選好：格差要因別

3. 被験者実験結果とアンケートとの対比

再分配は規範意識に関わるものであるため、アンケートにおいてはより規範的な回答をしてしまい、正直に自分の選好を表明しない可能性がある。被験者実験は、利己的に行動することでより期待できる報酬が高くなるという金銭的誘因を被験者に与えるため、より真剣に自らの選好に従って行動することが期待される。一方で一定時間特定の場所に拘束する必要があるため、集められる被験者の数や属性に自ずと限界がある。本稿では両方の結果を提示し、その差異について考察する。

被験者実験は2012年7月から12月にかけて行い、合計84人の本学学生が被験者として参加した。実験では被験者は互いに匿名のまま二人一組になった上で各々が12分間、知能テスト、単純作業、そしてくじ引きに近い作業のいずれかをPC上で行い、その結果勝利したほうが成功報酬500円を受け取る。勝者は分配者として相手にどれだけ分配できるか、また敗者は被分配者として相手からどれだけ分配されたいかを表明する。どちらの意見が実現するかは、2人が表明したあとでランダムに決定される。最終的に受け取る報酬はその分配額と、参加報酬500円の合計額である。ここでも表明できる上限は完全公平の250円としているため、分配者は自分の所得すなわち成功報酬と参加報酬の合計1000円のうち25%、被分配者は参加報酬500円の50%を上限に意見を表明できることになる。

分配者、被分配者の表明した再分配の割合の分布を図13, 14に示す。アンケートとの顕著な違いは、まずアンケートでは相当割合存在した上限額を分配する、下限額の分配を求めるといふ、非常に利他的な回答がほとんどないこと、そのため平均値で見ても、分配額ならアンケートでは10.2%であるのに対して5.3%と約半分になり、被分配額ならアンケートでは29.9%に対して44.2%と大幅に増加している。

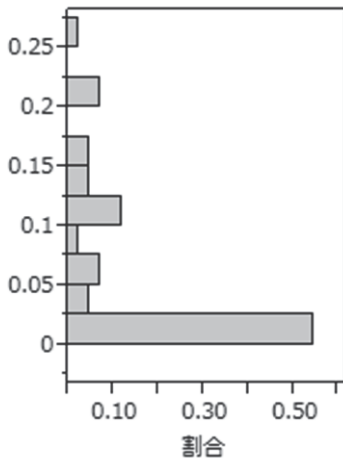


図13 分配者として分配したい所得割合：実験

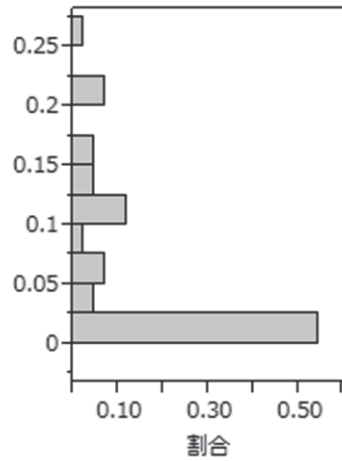


図14 被分配者として分配を受けたい所得割合：実験

アンケートと異なり、被験者実験では大学生が被験者となるため、ほとんど全員が20歳前後で、未婚、未就労という同一の属性を持つ。このため、選好が属性に関わるかについての検証は性別のみにとどまる。男女の属性による差に注目すると、分配者で見ると男性が4.6%、女性が8%と男性の方が利己的であるがこの差は統計的に優位な水準に達していない。(t=1.76, p=0.191, n=42) 一方で被分配者側を見るとこちらも男性の方が利己的で、男性が46.2%であるのに対して女性は36%、この差は統計的に有意である。(t=4.37, p=0.043, n=42) 男女差はアンケートでも見る事ができたが、分配者であるとき男性はより少ない分配を選好するという点でアンケートと逆になっている。

アンケートで見られた独立独歩や互助精神型の傾向はここでも見られるだろうか。基本的に実験で

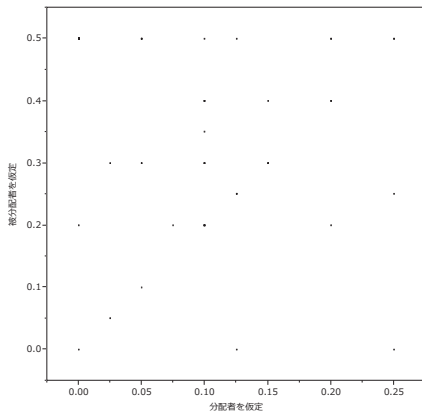


図15 分配・被分配の選好：プロット

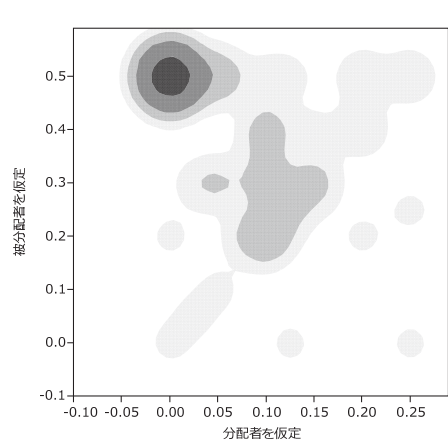


図16 分配・被分配の選好：密度

は被験者はどちらかの立場しか経験しないが、この実験では分配者、被分配者の役割を伝える前に、それぞれの役割になったらどれだけ分配しようとするか、またどれだけ分配されたいと考えるかを聞いている。実際の役割が判明した後の回答とやや異なる¹⁾のであくまで参考ということになるが、分布のプロットと密度が図 15, 16 である。アンケートで見られた独立独歩や互助精神型は殆ど見られず、かなりの割合が利己的な選択に集中していることがわかる。

以上のようにアンケートと実験の違いに注目すると、分配被分配の平均の割合でも、また分配したい割合、されたい割合の相関の面からも、より利己的に振る舞う様子が確認できる。

アンケートにおいて、所得格差の発生要因と再分配の選好を検証したところ、格差発生要因が運である場合、才能である場合、努力である場合の順でより再分配に鷹揚で、またより高い再分配を求める傾向が見出された。この被験者実験においては、知能テスト、単純繰り返し作業、くじびきという3種類のタスクで格差を作っており、これらはそれぞれ才能、努力、運に相当する。タスクの差によって再分配の傾向に差は見いだせるだろうか。結果は図 17, 18 に示されるとおりで、運による差によって分配に気前良くなるという傾向は明確ではなく、またタスク間での統計的な有意差も認められなかった(付表6)。

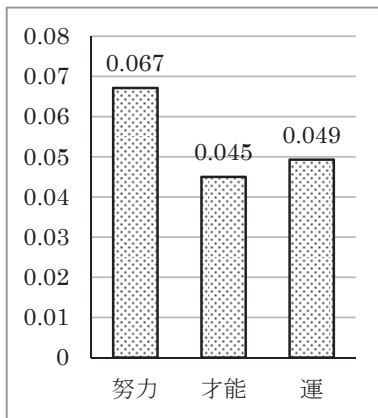


図 17 格差要因と分配選好

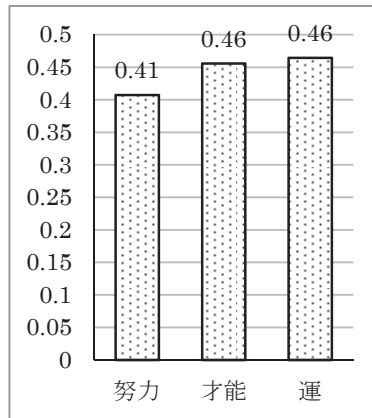


図 18 格差要因と被分配選

格差原因の効果は1700を超えるデータを集めるアンケートでも平均の絶対値の差はあまり大きくない。実験では各サンプル数は14にとどまり、統計的に有意な結果にはまだ到達しないという原因も考えられる。ある程度の量のデータの収集は今後の課題である。ただし海外に比べると、本学で同様の実験を行っても条件の差による行動の差があまり明確に現れない場合があり (Iida and Oda (2011)) 日本における格差の発生要因と公平感の結びつきが弱い可能性も考慮する必要があるかもしれない。

4. まとめと課題

所得再分配に関する選好はさまざまなアプローチで検証されているがいずれの方法も真の選好を見出す際の限界を抱えている。本稿はアンケートと経済実験の対比の中でその相補の可能性の検討を試みているが、ここでも検証すべき課題は多く残された状態である。検証の結果確認されたこととして、まずアンケートによって期待される、学生対象の被験者実験では把握できないより広い属性を持つ人々の傾向について調べた結果、高年齢であるほど相対的に豊かであれば高い割合の分配をし、貧しければ高い割合の被分配を求める傾向が確認されたが、未・既婚や雇用形態、扶養者数など他の属性と分配の選好との相関は見られなかった。被験者実験との対比においては、アンケートでは一般に男性はより気前よく分配するという被験者実験と逆の傾向が見られた。助けたいと思う人ほど助けられたいと考え、助けられたくないと考える人ほど助けたくないと、相互扶助や独立独歩型の選好を示す回答者がアンケートでは多く見られたが、同様の傾向は被験者実験ではほぼ見られないなど、両者の間には特徴的な違いが見出された。これらの違いは、実際に表明する分配額に受け取れる報酬が依存する経済実験という仕組みによってより利己的な動機が誘因されるものとして捉えることができる。一方で、アンケートでは独立独歩型や相互扶助型のように、ある面では利己的ながら別の面では利他的な再分配の選好を表明するものが多くおり、利己的動機がないとき、利他的な方向に回答が誘導されるそのされ方が対称的でない形になっている。被験者実験は人工的な環境での人々の行動を観察する形になるし、アンケートはこれも仮想の状況に対して自分がこう行動するだろうという予想を答えさせているに過ぎない。現実の選好がどこに見いだせるかについてはこの結果を踏まえさらに掘り下げる必要があると考えられる。

再分配への選好は、格差の発生要因に依存するという多くの被験者実験が示す結果に沿う回答を、アンケートにおいても確認することはできており、実験とアンケートの結果が繋がっていることも今回示されている。このような条件を管理した質問を精査することで、絶対的な再分配の選好を見出すことは難しくとも、条件による選好の変化の傾向は見いだせる可能性がある。ただし、本論で行った実験では十分に先行研究と類する結果になっているとは言いがたく、検証には更なるデータ蓄積が必要と考えられる。

注

- 1) 分配者に関して言えば、自分が分配者になると分かる前に表明した分配額の平均は6.7%で分かった後は5.3%に低下する。統計的にも有意な差である。(t=2.49, p=0.0168, n=42) 被分配者においては42%から44.2%へと上昇するが、これは有意な差ではない。(t = 1.12, p = 0.26, n=42)

参考文献

- Camerer, Colin F. (2003) *Behavioral Game Theory*, Princeton University Press.
- Camerer, Colin F. and Thaler, Richard H. (1995) "Ultimatums, Dictators and Manners." *Journal of Economic Perspectives*. Vol. 9 (2). p 209-19. Spring 1995.
- Cherry, T. L., Frykblom, P. and Shogren, J. F. (2002) "Hardnose the Dictator", *American Economic Review*, Vol. 92, NO. 4, pp. 1218-1221.
- Eckel, Catherine C; Grossman, Philip J. (2000) Volunteers and Pseudo-volunteers: The Effect of Recruitment Method in Dictator Experiments. *Experimental Economics*. Vol. 3 (2). p 107-20. October 2000.
- Hoffman, Elizabeth, Kevin McCabe, Keith Shachat, and Vernon Smith, (1994) "Preferences, Property Rights and Anonymity in Bargaining Games," *Games and Economic Behavior*, November 1994a, 7, 346-80.
- McClure, John; Meyer, Luanna H.; Garisch, Jessica; Fischer, Ronald; Weir, Kirsty F.; Walkey, Frank H. (2010) "Students' attributions for their best and worst marks: Do they relate to achievement?" *Contemporary Educational Psychology*. Apr, Vol. 36 Issue 2, p71-81.
- Oxoby, Robert J; Spraggon, John. (2008) "Mine and Yours: Property Rights in Dictator Games", *Journal of Economic Behavior and Organization*, 65 (3-4), p 703-13.
- Rousu, Matthew C and Baublitz, Sara J. (2011) "Does Perceived Unfairness Affect Charitable Giving? Evidence from the Dictator Game." *Journal of Socio-Economics*. Vol. 40 (4). p 364-67.
- Iida, Yoshio IIDA, and Oda, Sobei, (2011) "Does Economics Education Make Bad Citizens? The Effect of Economics Education in Japan", *Journal of Education for Business*, Vol.86, 234-239.
- Weiner, B. (1972) "Perceiving the causes of success and failure" E.E. Jones et al. (Ed.), *Attribution: Perceiving the causes of behavior*, Erlbaum, NJ, pp. 95-120
- Weiner, B. (1985) "An attributional theory of achievement motivation and emotion" *Psychological Review*, 92, pp. 548-573
- Weiner, B. (2010) "The development of an attribution-based theory of motivation: A history of ideas" *Educational Psychologist*, 45, pp. 28-36
- 飯田善郎 (2009) :「相対所得における他者とは誰か：アンケート調査から」, 京都産業大学論集社会科学系列, 第26号, pp. 131-156, 2009.

* 本論は科学研究費（基盤C）課題番号 23530388 の助成を受けたものである

付表1 回答者属性

a. 年齢層			f. 世帯所得 (単位万円)		
	人数	割合		人数	割合
20代	422	24.4%	200	216	12.5%
30代	513	29.7%	300	325	18.8%
40代	364	21.0%	400	277	16.0%
50代	431	24.9%	500	235	13.6%
b. 雇用形態			600	158	9.1%
	人数	割合	700	136	7.9%
正社員	1624	0.93873	800	112	6.5%
契約社員	106	0.06127	900	74	4.3%
c. 性別			1000	58	3.4%
	人数	割合	1100	29	1.7%
男性	1037	59.9%	1200	31	1.8%
女性	693	40.1%	1300	17	1.0%
d. 未既婚			1400	15	0.9%
	人数	割合	1500	17	1.0%
未婚	714	41.3%	1600以上	30	1.7%
既婚	1016	58.7%	g. 扶養者数		
e. 共働き				人数	割合
	人数	割合	0	931	53.8%
共働き	605	59.5%	1	262	15.1%
片方のみ	411	40.5%	2	250	14.5%
			3	180	10.4%
			4以上	107	6.2%

付表2 分配者回答の要因分析：同時点

項	推定値	t 値
切片	0.074566	8.18 **
年齢	0.007285	3.4 **
性別・男性	0.007428	3.21 **
雇用・正社員	-0.00118	-0.27
既婚	-0.00565	-1.53
既婚・共働き	-0.0007	-0.23
扶養家族数	0.000596	0.32
所得水準	-5.28E-07	-0.08
R ²	0.013482	
F 値	1.01	

付表3 被分配者回答の要因分析：同時点

項	推定値	t 値
切片	0.257768	13.55 **
年齢	0.015059	3.37 **
性別・男性	0.003135	0.65
雇用・正社員	-0.00041	-0.04
既婚	-0.01198	-1.56
既婚・共働き	0.005113	0.8
扶養家族数	0.004202	1.07
所得水準	-3.07E-05	-2.36 *
R ²	0.009847	
F 値	1.09	

付表4 格差発生要因による分配・被分配選好の有意差検定（アンケート）

	格差発生要因		格差発生要因	
			才能	運
分配選好	努力	t 値	1.41	5.58
		p 値	0.1595	<.0001
	才能	t 値		6.61
		p 値		<.0001
被分配選好	努力	t 値	6.02	13.83
		p 値	<.0001	<.0001
	才能	t 値		11.25
		p 値		<.0001

付表5 同時点間・異時点間配分の間の再分配選好の差の有意差検定：格差発生要因ごと

	格差発生要因	t 値	p 値
分配選好	条件なし	-1.19	0.2361
	努力	2.92	0.0035
	才能	1.44	0.1505
	運	-1.91	0.0566
被分配選好	条件なし	5.47	<.0001
	努力	-2.03	0.0424
	才能	-7.36	<.0001
	運	-11.41	<.0001

付表6 格差発生要因（タスク）による分配・被分配選好の有意差検定（被験者実験）

	格差発生要因		格差発生要因	
			才能	運
分配選好	努力	t 値	0.80	-0.64
		p 値	0.429	0.523
	才能	t 値		0.15
		p 値		0.8779
被分配選好	努力	t 値	-0.99	1.17
		p 値	0.3273	0.2502
	才能	t 値		0.18
		p 値		0.8619

Preferences of Allocators and Recipients in Income Redistribution: A Validation by Comparison of a Laboratory Experiment to a Questionnaire-based Survey

Yoshio IIDA

Abstract

In order to study preferences among allocators and recipients in the redistribution of income, we conducted both a questionnaire-based survey of adults and a laboratory experiment employing university students. Both was conducted with conditions resembling those of a dictator game, and then assessed with regard to similarities and differences with preferences arising from the survey method. The results of the laboratory experiment showed that the amount represented by the allocators as being available for distribution to recipients tended to be lower in comparison to the survey, whereas the amount that was requested from allocators by recipients tended to be greater. Upon closer investigation, preferences in the questionnaire responses were often observed to be altruistic on one hand and selfish on the other, with some who would distribute wealth widely as a distributors when wealthy themselves, but would seek to obtain large allocations when they were poor, and others who would not seek to obtain much distribution when poor, but would neither wish to distribute to others when wealthy. From this, it is suggested that a laboratory experiment cannot be said to encourage participant behavior to become more selfish through the monetary incentive of remuneration, and that nor is a questionnaire-based study which does not include such remuneration more likely to elicit more prescriptive answers. The reasons for this response pattern will be a subject for future investigation. We also inquired after distribution preferences in cases that assumed luck, effort, or ability as a single additional factor in the production of disparity. The results of the questionnaire demonstrated an increased preference for redistribution from the standpoint of both allocators and recipients in cases where an income disparity is attributable to the element of luck, even more than in cases where such disparities are attributable to effort or ability. This tendency has often been confirmed in laboratory experimentation. However, perhaps owing to an inadequate sample size, this tendency was not confirmed in the laboratory experiment conducted for this discussion, in contradistinction to the questionnaire.

Keywords : Income gap, Income redistribution, Laboratory experiment, Questionnaire survey, Dictator game